

沼津市若山牧水記念館

第63号 令和元年9月1日 編集・発行 公益社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 http://web.thn.jp/bokusui/



園の花つぎつぎに秋に咲きうつる このごろの日の静けかりけり 牧水

美しい短冊に、秋の歌が丁寧に書かれており、牧水の長子旅人氏による牧水真筆の証の付された作品である。

牧水は、大正九年に『創作』の経営を義弟長谷川銀作に委ね、八月十五日に一家をあげて沼津の「香貫の家」に移住して来た。東京にいた時より、静かに落ち着いた生活になつてきたことを感じて来てはいたものの、大正十年の四月までは、まだ体調がすぐれなかつたようだ。五月になつて、中国地方に旅行をして、九州へ帰郷してもよいかと考へられるようになり、岡山から瀬戸内海の直島へ行き、鯛網見物をたのしんだが、風邪を引き、大阪、神戸、京都と回つたのち、九州へは帰省せずに沼津へ帰つて来た。

八月に入つて、この旅行の疲労も癒えて元気になり、六日に舞踊家藤間静枝の誘いで吉奈温泉東府屋に泊り、「温泉宿の庭」と題する六首を詠み、十三日には裾野の景ヶ島の溪谷に遊び、佐野五竜館に一泊して、「裾野村」十首、「鶴鶴と河鹿」五首を詠んでいる。

九月十七日から、湯治のために信州の白骨温泉に滞在し、上高地から焼岳に登り、飛騨、富山、長野と遊び、十月

二十九日に沼津に帰つて来た。帰つた当初の四五日は元気だったが、その後、あまりよくない健康状態になつてしまい、『創作』大正十年十一月号の「編輯所便」には、身体に精と根とがつかず、無理を慎まなければいづどんなことになるかもしれないと心細い気持をつづっている。しかし、健康に注意をした結果、年内には元気になった。

掲示の短歌は、「秋近し」と題する十首中の一首で、「温泉宿の庭」、「裾野村」、「鶴鶴と河鹿」とともに、第十四歌集『山桜の歌』に収められており、大正十年八月中旬以降に、「香貫の家」で詠んだ歌だろうと思う。牧水高弟大悟法利雄氏は次のように解説している。(鑑賞若山牧水の秀歌)
今年の夏もはや盛りを過ぎ、咲きほこつていた夏の草花が次第に衰え、ずつと咲き続けている花も形が小さくなつたり色が秋らしい感じになつたりして来る。そしてつぎつぎに新しく咲く花はもうすっかり秋の草花である。それを朝夕に眺めて作者は季節の推移をしみじみと感じているのだが、「このごろの日の静けかりけり」という下句を見れば、その推移を嘆くというよりは、むしろ秋を迎えることを喜んでるのがわかる。

「秋近し」十首中には、よく知られている次の二首もある。
野末なる三島の町の揚花火月夜の空に散りて消ゆなり
愛鷹の根に湧く雲をあした見つゆふべみつ夏のをはりと
と思ふ

かたはらに秋ぐさの花

池田 はるみ

今年の三月三日、沼津市の若山牧水記念館に初めて行った。平成がもう少しで終わるといひな祭りの日である。若山牧水には少女の頃から知っている歌があり、大人になってからも愛唱しつづけた歌もある。

海底に眼のなき魚の棲むといふ眼の無き
魚の恋しかりけり
『路上』

は、少女の頃に愛唱した歌であり、

かたはらに秋ぐさの花かたるらくほろび
しものはなつかしきかな
『路上』

などは秋になると、今もふと口を突いて出てくる歌なのだ。だが作品をはじめ、この有名な歌人若山牧水の何を知っていたかという大方の過去の歌人と同様にはなはだ心もとなひものがある。短歌は残るが、歌人の人生そのものは忘れやすいのである。

近年は、伊藤一彦氏が若山牧水の本を次々と出されて後につづく者たちに伝えてくたさっている。宮崎県と同郷の、大学も同じ先輩歌人ということで、育った土地の自然や当時の生活環境なども分かる現代の優れた歌人が掘り起こした大仕事である。

一首目「海底に眼のなき魚の棲むといふ眼の無き魚の恋しかりけり」の歌には伊藤氏の著書『いざ行かむ、まだ見ぬ山へ』にはこう書かれている。

牧水は絶望の底にいる。海の底の暗闇の中の眼のない魚のように何も見ないでじっとしていたいとあり、こう続く。

これらの作の歌われた頃に小枝子（恋人）は女兒を出産した。千葉県の農家に里子に出したらしいのだが、養育費の負担がのしかかった。だが、大悟法利雄によれば「そのやりくりも大へんだが、それよりさらに苦しいのは、生れた子がはたして我子かどうかという疑問にさいなまれること」

と書かれている。大悟法利雄氏は初代若山牧水記念館館長である。牧水の初恋は恐ろしく苦悩に満ちたものだったが、少女であった私にはまだまだ理解の届かない苦悩であった。では何ゆえに魅かれたかと今にして考えると難しい。背後の生々しい物語は、短歌の特徴としてすべて省略されているので、作品が見せるイメージだけで鑑賞しているのである。

ただならぬ苦悩ではあるが「海底に棲む眼のない魚」という人間から見れば想像を絶する魚の光景があり、そのような苦しみを共有する人へのあこがれがあつたのではなかったらうか。あこがれは私にとつても魂の放浪、即ち浪漫だったのだろう。

二首目の「かたはらに秋ぐさの花かたるらくほろびしものはなつかしきかな」の歌も先人の歌と同様『路上』の作品である。つまり牧水の二十代の歌なのである。私の少女のころから現在までを感じ入らせた歌のある歌集である。伊藤氏は旅のうたとしてこう書いている。

花々は人間に語りかけたいと思っており、そして人間はその言葉に分かることができると思っている牧水のイメージが浮かぶ。ただ花の言葉が分かるためには、相手と同じ目線の高さに立たなければだめである。「秋ぐさの花」と同じ視線の高さに立つて初めて花は語ってくれたのだと書き、この歌は

寝ころんでいる場面を歌っている。

と書いている。目線の低い牧水がよく分かる解説だと思ふ。作者は先の歌と同じ苦悩の中にある時期であつたが、旅をしているという余裕がなつかしい風景を導き出しているようだ。懊悩は秋ぐさの花と共有する空間のなかで、やささの中に溶け込んで見えない。さんさん

と陽の降る秋のやさしい空間があるばかりなのである。ふるさとの坪谷の美しい自然の中で育った人の心のあり方なのだろうか、人為的な出来事にはなす術もなく立ち尽くしながら、なお清々しい心を持ち続けているように思われる。

妻はしたにわれは二階にむきむきにちさき窓あけくもり日に居る 『秋風の歌』
きはまりて恋しき時は三日にしてすへる煙草をひと夜には吸ふ 『砂丘』

牧水は二十八歳で太田喜志子と結婚をした。一首目は、二人でいるのが鬱陶しくなつて下と二階とに分かれたとも見える。しかしどことなく温かい感じがするのは「ちさき窓あけくもり日に居る」という「ちさき窓あけ」のそつとした感じや、「くもり日」の落ち着いた感じが喧嘩をした二人には見えないのだ。伊藤氏はこの歌についてこう書いている。

ちぐはぐ感のある夫婦の歌と思う人もあるが、この「むきむきに」、つまりそれぞれを尊重したのが牧水と喜志子の間柄だった。とくに喜志子はその点で夫を理解して支えた見事な妻だった。

妻の喜志子は牧水の、家族を愛する心を持ちながら自然の中へと旅をせざるを得ない心とのせめぎ合いをよく理解していたというのである。牧水の人生は、この良き妻を得たとい

う時点で決まったようなものだったろう。家族の温かさを手に入れ、行かずにはいられない旅にも出かけられたのだ。その間、喜志子は子らを守りつつ寂しさや貧しさに耐えていたのだろう。現代の女性から見ても、喜志子は夫を大きく理解するという点においても実に良き妻だったろうと思う。二首目の「きはまりて恋しき時は三日にしてすへる煙草をひと夜には吸ふ」という歌は、妻が恋しい時は三日分の煙草を一晚で吸ってしまうというのである。ストレスからくるヘビースモーカーのようなもので体には悪い。妻とは歌に書かれてはいないが、恋しきの辛抱が切れている感じが可笑しく愛らしい。伊藤氏は

旅に出れば妻が恋しくなるとわかっていても、旅に行かずにいられないのが牧水だった

と書いていてこの夫妻のありようへの理解を助けている。

四人目の末のみづこのとりわけてかはゆしおのれ病みがちにして 『山櫻の歌』
をとめ子のかなしき心持つ妻を四人子のもとおもふかなしき 『黒松』

こういう歌に出会うと、歌人は実人生を見せながら歌い継いでいくものなのだとつくづく思う。牧水に四人目の子が生まれたのだ。富士人と名付けられている。沼津に移り住ん

だ翌年に生まれた。一首目の「みづこ」は、出産後あまり日の立たない子のことである。四人目を取り分けて可愛いという。ただ、自分病みがちではあるが、という所が切ない。酒による病が進行していたのだ。二首目、この時喜志子は三十六歳。今では女盛りだがこのころでは高齢出産だったのだろう。喜志子はこの一首でかなりの苦勞が乗り越えられそ



牧水の全 15 歌集

うなやさしい歌だ。現代と比較をすれば多くの子どもに恵まれた牧水だった。

鮎焼きて母はおはしきゆめみての後もう
しるでありありと見ゆ
『黒松』

留守居する子等うちつどひたうべるむす
の桃の実を父もたぶるよ
『黒松』
妻が眼を盗みて飲める酒なれば惶て飲み
噎せ鼻ゆこぼしつ
『黒松』

一首目は、母の夢を見た歌。夢のなかで鮎を焼いている母の後ろ姿を見ているのだ。それは目覚めた後も長く残っていたらしい。しつかり者だった母のイメージが凝縮されているような気がする。二首目、牧水の旅行中の歌。この歌は「帰途病みて別府温泉に滞在す」という詞書がある。旅の帰途、病んで温泉旅館に投宿したのだろう。父を待っている子どもたちが食べているだろう桃を父も食べるといふ。子どもたちがいる賑やかな家になかなか戻れなく、恋しいのである。「その桃」

「その」の限定が切なく響く。ひとり旅に彷徨いながら愛する家族を偲ぶ。それが、この人の歌を最も輝かすスタイルだった。三首目は晩年の歌。伊藤氏は

瀕死の床でも牧水は酒を飲んだ。最期を看取った医師が、死後三日を経ても屍臭や死斑がなかったのはアルコールによるものかと書き残している

と書いている。禁酒を守れなかった牧水は妻の眼を盗んで酒を飲む。足音でもすれば惶て飲んで嘔せて鼻から酒をこぼしたと歌う。自らのあられもない姿を描写している。笑うというより壮絶な姿である。命を懸けた盗み酒なのだ。

天地のこころあらはにあらはれて輝ける
かも富士の高嶺は
『黒松』

酒ほしさまぎらはすとて庭に出でつ庭草
をぬくこの庭草を
『黒松』
芹の葉の茂みがうへに登りあてこれの小
蟹はものたべてをり
『黒松』

一首目は、「裾野にて」の詞書があり、富士の裾野で詠んだ歌だが、晩年を過ごした沼津の千本浜の家からは富士山が大きく見えたようだ。私も案内をしていたのだが雨の日で富士は見えなかった。海も松林も美しい所だった。「天地のこころあらはにあらはれて」はアニミズム的な捉え方だが、すつきりとして牧水にはふさわしい。そのように見えた「天地のこころ」だったのだろう。輝ける富士の高嶺への賛辞である。

次は、「最後の歌」と詞書がある二首。年譜によると昭和三年九月十七日、沼津の自宅で永眠、とある。一首目の「酒ほしさまぎらはすとて庭に出でつ」の素直さはどうだろう。酒の欲しさは草をぬいて紛らわすという。二

首目の「これの小蟹」の姿もありのままである。この視線によって小蟹がものを食べる一瞬が永遠に捉えられた。この世の普通がこんなにも不可思議なものだったのだ。

牧水の歌はひとのこころをどこか遠くへ運ぶようなところがある。どこかはどこか、と言えば人の心の行けるところまでと思う。可能性のようなものだろうか。

この牧水を大正・昭和・平成とどんどん時が隔たりつつある中で読むことができ嬉しかった。

伊藤一彦氏にも感謝いたします。

「筆者プロフィール」 いけだ はるみ



昭和二十三年和歌山県生まれ。昭和六十二年未来短歌会に入会、岡井隆に師事。現在「未来」選者・編集委員。

平成九年歌集『岬が国 大阪』でながみ現代短歌賞、現代歌人集会賞。同十三年歌集『ガーズ』で河野愛子賞をそれぞれ受賞。歌集に『奇譚集』『婚とふろしき』『南無晚ごはん』『正座』がある。大の好角家で相撲をテーマにしたエッセイも執筆している。平成三十一年三月に開催した第三十一回「雛の歌会」の講師。